入選

— 大学・一般の部 —

「社会の駒になるために」

奥村博子さん

推　し　本：『演劇入門』

著　　：平田オリザ

推したい相手：人付き合いレベルがゼロで
毎日が辛いみんな

「社会の駒になるために」　奥村博子

この本の偉大さについて語る前に、私がこの「演劇入門」と出会った経緯を説明させていただきたい。私はしがない会社員である。お客様の無茶なご要望にコメツキバッタよろしく頭を下げて食い扶持を稼ぐ殺伐とした日々である。世間では、独自性を発揮せずただ与えられた仕事をこなすだけのサラリーマンを指して「歯車」や「駒」と呼ぶことがある。その揶揄に憤る人は多い。しかし、私のようなコミュ力が壊滅的な人間にとっては、社会の駒として働く事さえ困難で、毎日が苦痛で仕方がないのだ。ある日、何もかも投げ出したい気分だった私は現実逃避のつもりで日記に嘘を書いた。いかにもそれらしく、かつ突飛で愉快な文章を作るというのは意外と頭を使う。私はその時、フィクションを創造する事に意識を注ぐと日常での苦しみが和らぐ事を発見した。即席箱庭療法的な効果があったのかもしれない。その嘘日記を出発点として、完全な創作話として小説を書くようになるまでに時間はかからなかった。そして、よりリアルな、より突拍子のないフィクションを追求すべくシナリオや脚本の指南書を読むようになった。その中で出会ったのが、この本である。仕事から逃げたい一心で辿り着いた「演劇入門」。これが予想外にも私の対人コミュニケーションにも影響を与え、なんと日々の苦しみからの脱却に貢献しつつあるのだ。これは是非誰かに知ってもらいたい。遠回りな枕詞となったが、私と同じように、何回聞き返しても上司の言いたいことがさっぱり分からなかったり、自分の報告が曲解された挙句怒られている「人付き合いレベルゼロ」の皆に是非この本を勧めたい。本書は、舞台をより「リアル」にするには何を考えるべきかについて具体的に解説したものである。たいていの舞台は実際に役者が目の前で芝居をするので内容が何であれリアルではあるはずだが、ここで言う舞台の「リアル」さとはその舞台上で演じられる状況への納得感を指す。確かに、映画やドラマを見ていて、突然の展開に（素人がおこがましい事だが）思わず「いや、そうはならんやろ」と突っ込みたくなる事がある。そんな風に観客を白けさせず物語にのめり込んでもらうためには、創作上のリアルさを丁寧に構築する必要がある、という事らし

い。そのためにどのような場面設定にするべきか、どのような登場人物が必要か。小説制作のために本書を読み始めた私にとっては、どれも大変勉強になるトピックである。しかし、その中で私が最も感銘を受けたのは戯曲の書き方指南がひと段落した次の章である。それは小説には無関係のはずの俳優や演出について述べた章で、俳優の持つ「コンテクスト」について解説している。言葉には、その言葉を発する者がイメージする「範囲」がある、という事らしいのだ。芝居におけるリアルさは、演出家と俳優、または芝居と観客の間のその範囲の概念、つまり「コンテクスト」を共有する作業である、と著者は言う。なるほど、これは小説でも（なんなら嘘日記にも）言える事である。ただ思いつきで突飛なシーンを繋ぎ合わせても魅力的なＳＦファンタジーになり得ないのはそのためだったのか。私は目から鱗が落ちた。さらに、私はある事に気がついた。これは、フィクションのためだけの法則ではないのではないか？例えば、会社で上司に「〇〇商社のあの件、今どこまで進んでる？」と聞かれた時、私は「あの件」がどれなのか、「どこまで」とはどの程度の詳細を求められているのか汲み取れず何から何までダラダラと説明する傾向にあった。なかなか上司の意図した内容に到達せず、痺れを切らされ「もういい、自分で確認する」と邪険にされては傷ついていた。その度に私は「自分はなんて頭の処理が遅いんだ」と悲嘆していたが、これもコンテクストの擦り合わせの問題なのではないか？それに気づいてから、臆せずに「あの件とは〇〇の件ですか？」とまず擦り合わせが出来るようになり、心なしか邪険にされる頻度が減った気がするのである。これは私にとって、大きな気づきだった。人は言葉を使って思いを伝えるが、同じ言葉であっても必ずしも同じ意図を共有しているとは限らない。その前提を知ってしまえば、人とコミュニケーションを取ることに恐怖を感じる必要などない事に気がついたのだ。この感動、同じように言葉に悩まされている人にも味わってもらいたい！さて、ここで皆さまにこの本を紹介したことによって、せっかく私が社会人の最底辺から這い上がった秘策を多くの人に知られてしまうわけであるが、まあ、大丈夫だろう。本書で著者が「演劇とは、すべての手の内をさらけ出したところから始まる芸術」と言うように、現実での人と人との関係性もまた、これまで悩んできた紆余曲折の全てをさらけ出してから始まるのだから。